

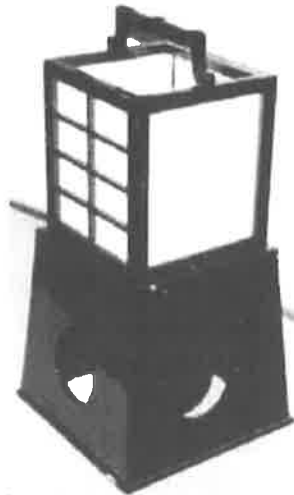
長屋のくらしと道具 ①

あかり

江東区深川江戸資料館



置行灯 (レプリカ)
春米屋居間



有明行灯 (レプリカ)
船宿 升田屋



『当世七癖上戸』
(名古屋市蓬左文庫 蔵)



『絵本十寸鏡』延享5年刊より
(臨川書店 復刻)

深川江戸資料館は、実物大で復元した数棟の江戸時代の建物と、その中に配置された生活用品によって構成された、江戸の情緒を楽しむことのできる資料館です。資料館ノート第45号から6回に亘り、これら江戸の人々の生活を彩った生活用品のいくつかを、展示室から拾い上げ、用途ごと

にまとめて紹介していきます。現代の生活からみれば「不便」な道具たちですが、さまざまな工夫に感心させられる面も少なくありません。

第1回の今号は、照明の話から始めましょう。

照明具の歴史

今では、あかりは人の心をなごませ癒すものとして、そのバリエーションも豊富です。しかし、電気の普及以前は、照明具というより「灯火具」とよぶことがふさわしい道具たちでした。

古代の灯火は、屋外の焚き火、屋内の囲炉裏に始まります。やがて灯油(当時は主に荏胡麻の油)を入れた火皿を台に乗せた「灯台」が出現し、仏教とともに灯籠も伝えられました。

中世を経て江戸時代になると、菜種油が灯油の主流となり、行灯、ひょうそく、瓦灯などが普及しました。いっぽう、ろうそくを使用する灯火具としては、燭台、手燭、雪洞、提灯などが一般的です。

総合展示室の灯火具たち

総合展示室でみることのできる灯火具は、一覧のとおりです。展示の設定年代は、江戸時代の終

総合展示室生活用品 照明器具

(仏壇・神棚・縁起棚・荒神棚の専用灯明台を除く)

船宿 相模屋	軒行灯 八間 屋号入り弓張提灯 置行灯 (筒型・丸型) 掛行灯 舟行灯 瓦灯 ほうずき提灯
船宿 升田屋	軒行灯 八間 小田原提灯 ぶら提灯 掛行灯 舟行灯 置行灯 (筒型・丸型・有明行灯) ほうずき提灯
八百屋	置行灯 (角型) 掛灯 掛行灯
つき米屋	置行灯 (角型) 掛灯 (かわら製) 手燭
政 助	置行灯 (角型) ろうそく
秀 次	置行灯 (角型) ぶら提灯
松次郎	置行灯 (角型) ぶら提灯 弓張提灯 瓦灯
おしづ	置行灯 (丸型) 手燭
大 吉	置行灯 (角型) ぶら提灯 ろうそく
床見世・屋台	「稻荷鮎」 ぶら提灯 「二八そば」 掛行灯 「水茶屋」 掛行灯 「天ぶら屋」 灯明皿 「虫売り」 掛行灯
土 蔵	蔵掛行灯
年中行事用品	「初午祭り」 地口行灯 12 本

わりに近い天保期(1830～44)です。現在に比べ、灯油もろうそくも貴重品。長屋にクラス庶民の生活では、長時間ふんだんに使用するようなゆとりはありません。生活の大半の活動は、日の出から日没までの時間帯にすませます。夜間、灯火のもとでの行動はごく限られていました。

展示資料の中からいくつかの灯火具の使い方や歴史を紹介します。

がとう 瓦灯 展示室の照明具の中で一番のスグレモノだと筆者は思っています。釣鐘型の土器の上に火皿を置き、普段はここに点灯して照らします。寝る時は火皿を下ろし、釣鐘型の土器をその上にかぶせます。すると、釣鐘型の蓋に入った切り込みからもれる光だけになり、光量を加減することができますのと同時に、落下物が燃えることも防げるため、寝具のそばで使うことも多かったです。

江戸庶民の簡便な照明具として普及したのですが、原型は室町時代からあったもので、福井県の一乗谷遺跡から出土しています。



瓦灯(レプリカ)
長屋松次郎



『教草女房形気』
(東京都江戸東京博物館蔵)

ちようちやう 提灯 展示室でもさまざまな提灯をみることができます。江戸時代の携帯用照明具としては最も



『画本狂歌 山満多山 下』文化元年刊より
(臨川書店復刻)

広く使われた道具。直接下げるようになってるのがぶら提灯。防火上の理由から、取り扱いに気をつけるよう度々御触れがだされました。

弓型の竹に提灯の上下を止めて使用するのが弓張り提灯。ほかに、使わないときの収納が便利な小田原提灯もあります。

あんどん 行灯 行灯もさまざまなものを総合展示室で見ることができます。定番は、角型の置き行灯で、

展示室のどこの家でも見られます。

ひとひねりしてあるのが有明行灯です。冒頭に掲げた行灯の写真を見て下さい。瓦灯と同様に、写真では台になっている黒い木箱を灯火の上に被せると、月の形の切り込みからもれる光だけにすることができ、光量の調節ができる行灯です。冒頭に掲げた右端の絵は、丸型の置き行灯で、中の仕組みがよくわかります。

はちけん 八間 紙を張った大きなかさに火皿を吊りした照明具。シャンデリアを思わせるこの器具は、人のたくさん集まる所で使われる、盛り場らしい器具でした。八間四方を照らすという意味でこう呼ばれました。

展示室で、背の高い見学者の頭が八間に触れるのを見ると、「灯油が入っていたら、どうなるのか」と心配になるのですが、江戸時代のそういう事故を記述した文献を、見たことはありません。成人男性の平均身長が156cm程度であったといわれる時代のことだからでしょうか。



八間(レプリカ) 船宿 相模屋

その他 そのほかにも、夜の航行に欠くことのできない船行灯、灯火が原因の火事を防ぐため、紙の覆いの外側を、さらに鉄製の枠と網で覆った蔵行灯、壁にかけける掛行灯、便所の壁に蝋燭を固定する掛灯など、総合展示室では、さまざまな賢い灯火具たちが活躍しています。

あかりの近代化

明治維新の後、カンテラや石油ランプが普及してきます。カンテラは、幕末から越後で出る石油を使い、少しずつ普及していましたが、ランプと石油が輸入されるようになって、各地で本格的にランプが使われるようになっていきました。屋外ではガス灯も普及し、やがて家庭でも熱源としてのガスコンロとガス灯が兼用で使える器具が現われて来るのが明治末期のころのこと。その後電灯も家庭用が普及し、ランプに慣れた人々は、吹いても消えない電灯に驚いたというエピソードが残されています。